

しいえらく

Instituto de Estudios Latinoamericanos de la Universidad de Estudios Extranjeros de Kyoto
Instituto de Estudos Latino-Americanos de Universidade de Estudos Estrangeiros de Kyoto

vol. 35 2018年7月1日

京都外国語大学



第17回ラテンアメリカ教養講座開講

2018年6月6日から7月4日までの毎週水曜日、京都外国語大学ラテンアメリカ研究所主催ラテンアメリカ教養講座が開催された。テーマは「ダンス! ¡Danza! Dança!」。今回は日本人にとってもなじみ深いタンゴ、ラテンアメリカ起源の社交ダンスから、まだまだ知られていないブラジルのカポエイラなどの多種多様なダンスの歴史や普及の時代的背景、変容過程を実演を交えて取り上げた。5回にわたる各講座の概要を以下に掲載する。

カポエイラの魅力と多様性

西村 晃輔

・カポエイラの歴史と成り立ちについて

カポエイラはポルトガル統治時代のブラジルで生まれました。奴隷制によって主にサトウキビ産業の労働力としてアフリカから連れてこられた黒人たちによって、農場主たちに抵抗するために編み出された格闘技です。怪しまれないよう、歌やダンスに見せかけてカモフラージュしていたため、他では見られない独特な格闘スタイルになったと考えられています。

・カポエイラのスタイルについて

カポエイラをだれもが楽しめる文化にするために格闘技の動きなどをミックスし、規律やルールを設け、後に「ヘジョナウ」と呼ばれるスタイルを創設したのがメストレ・ピンバという人物です。ヘジョナウに対してメストレ・パスチャーニャは伝統的なカポエイラを継承する「アンゴラ」と呼ばれるスタイルを創設し、この2つの流派はそれぞれに、日本でいえば空手や柔道のような、ブラジル固有の文化として広く人々に浸透し、子供が

ら大人までカポエイラを通してふれあい、学んできました。

カポエイラをする人口が増えた現代では、様々なグループが生まれ、それぞれに多様な価値観が生まれ、前述の2つの流派にとらわれない、「コンテンポラリーニア」と呼ばれるスタイルも生まれています。



写真1 カポエイラのパフォーマンス（ヘロオリソソチ）

(私の所属している「カポエイラジェライス」というグループもその1つで、アクロバティックな動きから技を繰り出すスポーティーなスタイルです。)

・カポエイラの様式について

「ホーダ」と呼ばれる大勢の人で作った輪の中で2名が組み手を行います。ホーダでは実際に楽器を弾いてリズムを奏で、歌と手拍子で盛り上げます。組み手をする2名は入れ替わりながら、蹴り技主体のアクロバティックな動きで、エネルギーを高め合います。



写真2 ホーダの様子(リオデジャネイロ)

・カポエイラの身体的効果について

カポエイラのもたらす効果として身体的な側面では挙げられるのが、左右のバランスが整った身体になるという点です。カポエイラの動きは常に円運動の中で行われ、左右対称にほぼ片寄ることなく使われます。また床に手をつき身体を逆さまにすることもあり、上半身、下半身ともに左右バランスのとれた、体幹の整った身体を作ることができます。豊かなリズム感覚も身につきます。

・カポエイラで何を学ぶのか

自主性

カポエイラでは難しい技や動きに対して、これができるだけいけないという制約はありません。簡単な動きだけでもカポエイラは楽しめます。



写真3 子供達の練習風景(京都カポエイラアカデミア)

しかしカポエイラに慣れ親しみ、上級者、初心者問わずいろいろな人とカポエイラをする中で、新しい技や動きをやってみたいという思いが生まれてきます。そうするためにどうすればよいのか、考えるのは個々の自主性に委ねられます。これが自分で考えて行動するという、自発的にとりくむ姿勢、気持ちを伸ばすことにつながります。

適応力

カポエイラのホーダ(円形の組み手)においては、歌や楽器、手拍子で組み手のエネルギーを持ち上げる傍ら、その組み手のスタイルなど、どのポジションの人間がどのような動きをしているのか、状況を観察し、それに応じて適切な対応ができることが求められます。

表現力

カポエイラでは顔の表情で余裕を見せたり、感わせたり、ワザと隙を作って相手を引き込んだり、様々な方法で騙し合うことで、駆け引きをします。またカポエイラの歌や楽器の技術も、ホーダのエネルギーを維持する重要なポイントです。

・まとめ

カポエイラは互いを傷つけること、または勝ち負けを目的としていません。カポエイラの面白い所は「相手を傷つけない、相手を尊重する、上級者を敬い初心者をいたわる」というような、人間が社会に出て生きていくうえでの当たり前のルールがそのままリンクする点です。ホーダに集った人間で協力しながら、いかにエネルギーを高め合

えるか、維持できるかがとても重要なのです。

ブラジルでは子供たちに単に運動をさせるためだけでなく、社会のルール、上下関係、規律や秩序を学ばせることを目的にカポエイラを習わせています。

日本においては武道に近いとらえ方であると思います。しかしブラジル生まれであるカポエイラの独特な動きや歌、音楽、リズムを通じてコミュニケーションをとりながら、「人と人との調和」

を学べるという点は、日本の子供たちの健全育成に、また社会生活を送る大人たちにとっても、他にはない効果を期待できると考えています。

参考：京都カポエイラアカデミア

(<https://kyoto-capoeira.com/>)

(NPO 法人カポエラジェライス理事長 / 京都カポエイラアカデミア代表)

『魅惑のフラメンコ』

山本 秀実

フラメンコは、インドから流浪の旅の果てスペインに辿りついたヒターノ（ロマ、ジプシー）発祥とされています。ヒターノは特に気候の温暖なアンダルシアを好みました。元々身のこなしが軽やかで歌舞音曲にたけており、イスラムの影響を多く受けたアンダルシア独特の音楽をアレンジして、フラメンコが出来ていきました。7県あるアンダルシア州では主に、セビージャ、グラナダ、カディスなどで曲が多く作られました。

最初にカンテ（歌）、後に伴奏のギター、さらにバイレ（踊り）が加わり、三位一体の芸術と言われる、ほぼ現在の形になったのは、18、19世紀のことです。



セビージャのタブラオ（フラメンコライブハウス）にて

フラメンコは当初、下品なものと見られていました。他のジャンルでも同じことが言えますが、

突出したスターが現われることで、文化のひとつと見なされるようになったのです。

バイレは最初小さい酒場で踊っていましたが、そんな中、舞踊団を作り、世界を回るアーティストが現われ、それに追随する人も多く輩出しました。

ラ・アルヘンティーナ、エスクデロ、カルメン・アマジャ等々。そしてもう数十年も前のことになってしまったアントニオ・ガデス（1936 - 2004）は、たくさんの優れた舞台作品により、フラメンコを芸術に押し上げたと言えるでしょう。主な作品は「血の婚礼」、「カルメン」、「恋は魔術師」など。映画化もされています。

では日本での歴史はどうでしょうか。日本に最初のフラメンコが入ってきたのは90年程前。ラ・アルヘンティーナが踊ったそうです。後、戦時体制下鳴りをひそめていたものの、昭和30年頃から有名舞踊団の来日が続ぎ、サラ・レサーナが数回来日。それによりフラメンコに魅せられた人が多いと聞きます。

フラメンコの曲調は、グランデ（重い、ゆっくり）、インテルメディオ（中位）、チコ（軽い、早い）に分かれます。また、ヒターノ独自の曲とは別に、アンダルシア民謡と結びついたもの、スペイン民謡と結びついたもの、中南米音楽と結びついたもの、にも分けられます。その内、中南米と結びついたものは、イダ・イ・プエルタ（往復）と呼び、コロンピアーナ、グアヒーラなどがありますが

ずれも中南米らしく明るい曲です。

そしてフラメンコの特質として付け加えなければいけないことは、楽譜が無く、即興性があるということです。フラメンコには厳格なルールがありますが、それさえ守ればある程度自由に変わることができます。ルールは「三位一体」と前述した、カンテ・ギター・バイレに共通しており、お互いを熟知し、反応し影響し合うことによって最高のパフォーマンスにもなり得ます。

私がフラメンコを踊るようになって、もうすぐ40年。40年前はフラメンコと言えば「星のフラメンコ」か「カルメン」かと言われる程認知度が低かったのですが、今や日本のフラメンコ人口はとても多くなり、幅広い年齢層に支持されています。

す。若い盛りには、強く激しいリズムと表現の奔放さに酔いしれる。また年を重ねれば失うものも多いけれど、それと引き換えにたくさんの経験を心得て、表現に厚みが出る。一生をかけて追い求め続けることのできる芸術と言えます。

あんなに激しく床を踏んで膝が痛くならないのか、とよく質問されますが、フラメンコは足腰に悪影響がないように適切に足を床に踏み込み、指先も脳も使うことによって、むしろアンチエイジング効果がある、と期待されます。実践を交えての教養講座を活字にするのは困難ですが、フラメンコはこれからも多くの人を魅惑し、生き続けることでしょう。

(京都スペイン文化協会理事長)

「Shall we ダンス？」の世界 —ラテンアメリカ起源の社交ダンス—

辻 豊治

映画「Shall we ダンス？」が描くダンスは、一般人向けの社交ダンスであるとともにダンス競技者による競技ダンスとしての性格をもつ。競技ダンスの種目はボールルーム（スタンダード）ダンス5種目（ワルツ、タンゴ、スロー・フォックストロット、クイック・ステップ、ヴィニーズ・ワルツ）とラテンアメリカダンス5種目（ルンバ、チャチャチャ、サンバ、パソ・ドブレ、ジャイブ）に分かれる。前者のタンゴ、後者のルンバ、チャチャチャ、サンバがラテンアメリカ起源となる。本講座では各5種目の成立起源、ヨーロッパへの波及の経緯、日本における社交ダンスの歴史、ブラジル・サンバやアルゼンチン・タンゴとの違いなどに言及し、実技とDVDで実際の踊りを紹介した。

宮廷舞踊として発展したヨーロッパ起源のダンスは20世紀に入りラテンアメリカ起源のダンスが取り入れられ、さらに1950年頃にイギリスを中心にして標準化が進み、現行の社交ダンスが成立した。世界最高峰のダンス競技会は全英選手権（ブラックプール）とUKオープン選手権（ボーンマス）といずれもイギリスで開催されている。タンゴは1880年頃アルゼンチン首都の港町ラ・



社交ダンスの基本ステップを体験する参加者

ボカ地区とウルグアイの首都モンテビデオのラブラタ河兩岸の河口地域で広まった。タンゴは元来、この地域にやって来たスペインやイタリアからの貧しい移民のフラストレーションのはけ口として酒場で踊られた場末のダンスであったが、フランスで洗練され、社交界のダンスとなった。アルゼンチン・タンゴはフレンチ・タンゴを逆輸入して一般化した。サンバは19世紀末、バイア（サルヴァドール）から移住した黒人奴隷労働者たちがリオデジャネイロに持ち込んだ打楽器のみのリズムにアフリカの宗教的民族舞踊とヨーロッパの

舞曲ポルカやマズルカなどの要素が混ざり合って成立した。リオのカーニバルでサンバが踊られるのは20世紀に入ってからのことである。1928年に最初のサンバ学校が設立された。ルンバも元々はアフリカでの豊穡を祈念する宗教的舞踊が転じて求愛や愛の葛藤を表現するダンスとして成立した。チャチャチャはルンバをアップテンポで踊るものでダンス・スタイルは基本的に同じである。

日本における社交ダンスは1883年の鹿鳴館時代とともに始まる。周知のように明治政府は不平等条約改正のため、外務卿井上馨が提唱した欧化政策の一環として鹿鳴館において舞踏会を開催（種目はカドリーユやヴィニース・ワルツ）し、近代国家としての外見を示そうとした。1918年には日本で最初のダンスホール鶴見花月園が横浜で開設された。そして1920年代フランスとイギ

リスから別ルートで現代ダンスが紹介された。フランス・ルートでは、当時パリの社交界に出入りしていた目賀田綱美氏（目賀田男爵と呼ばれている）の帰国にともない1926年にフランス流のダンスが、それに前後してイギリスから標準化されたダンスがそれぞれ紹介された。日本のダンスはイングリッシュ・スタイルが主流となった。1936年の時点で主なホールだけで全国に47軒存在したが、戦時色が強まるとダンスホールは次々と閉鎖され、日本の社交ダンスの歴史はひとまず幕を閉じた。戦後は占領軍がもたらすダンス・ブームとともに始まり、NHKのダンス講座や映画「Shall we ダンス？」（1996年）の大ヒット、TV番組の芸能人による社交ダンス企画などが社交ダンス普及の一助となっている。

(IELAK 客員研究員)

アルゼンチンタンゴにおけるバンドネオン ～天使から悪魔の楽器へ～

高橋 京子

第17回ラテンアメリカ教養講座のテーマは「ダンス! ¡Danza! Dança!」という事であったが、今回はダンスに固執せず、アルゼンチンタンゴという音楽全般について、中でもアルゼンチンタンゴには欠かせない楽器でありながら、他ではまず聴くことのないバンドネオン（演奏：星野俊路）に焦点を当てた。

I：タンゴの歴史

まずアルゼンチンの歴史であるが、16世紀よりスペインの支配後、1816年7月9日独立宣言、混乱の時代を経て1862年「アルゼンチン共和国」が成立。移民の誘致などの政策を打ち出し、鉄道網や港湾が整備され、農畜産業が発展していった。タンゴはその頃、急増する移民がまず足跡を記したブエノスアイレスの場末で生まれ、経済発展の勢いに乗って成長していく。移民船の着岸地であった「ラ・ボカ」（河口）地区（写真1）には共同住宅が立ち並び（写真2）、船員や港湾労働者が集まる場所で彼らの相手をする女性達の職場



写真1 ラ・ボカ地区

にもなった。そこで、ヨーロッパ伝来のワルツやポルカ、アフリカ起源のカンドンベなどがミックスされ、下積みの人達が抱える日頃の不満、嘆きを伴い、やがてはブエノスアイレス独自の文化に育っていく。この頃の背景を歌った「淡き光に」、「カミニート」、「カンソネータ」の3曲をCD鑑賞。



写真2 カミニート

II：日本人とタンゴ

アルゼンチンタンゴの日本への初上陸は1928年（昭和3年）であるが、これより前に1920年（大正9年）目賀田綱美男爵（1896～1969）がパリでアルゼンチンタンゴを踊った。勝海舟の孫である目賀田男爵は遊学中のパリで、その頃大流行していたタンゴと出会い、タンゴダンスのステップやレコードを持って帰国、ダンスがさかんであった上流階級にアルゼンチンタンゴを広めた。その後、欧米の音楽が敵視された戦時中さえ、同盟国ドイツ生まれのタンゴ（一般的にコンチネンタルタンゴと呼ばれるヨーロッパで作られたタンゴ）や、中立国アルゼンチンのタンゴは聞く事ができ、タンゴは日本人に深く親しまれることになる。

III：ラ・クンパルシータの歌詞

世界中で有名なこの曲は1916年ウルグアイの学生、ヘラルド・エルナン・ロドリゲスによって骨組みが書かれ、その後、別の人物により加筆、修正、1924年に歌詞が作られる。先に挙げたカミニート同様、ふられたあとの嘆き節だが、恋人のみならず飼っていた犬にまで見放され一人ぼっちだ、との歌詞は強烈である。

IV：2種類のタンゴダンス

アルゼンチンタンゴダンスには、ショーなどで人に見せる為に踊られるステージダンス（写真3）と、街の人達が楽しむ為に踊るサロンドダンス（写真4）の2種類がある。

2005年アルゼンチン世界タンゴ選手権・ステー



写真3 亮&葉月のステージダンス



写真4 サロンドダンス

ジダンス部門で日本人初の準チャンピオンとなった「亮&葉月」のDVDと、ブエノスアイレスの人達がミロンガと呼ばれるダンスホールで踊りを楽しむ様子のDVDを見て頂いた。

V：バンドネオンの魅力

バンドネオンは1840年代ドイツのハインリッヒ・バンドがアコーディオンの一種を改良したものである。ドイツでは賛美歌を伴奏するための携帯用オルガンとして使われた。ところが、移民が船乗りかがこの楽器をアルゼンチンに持ち込み、どこか憂いをたたえた音色、鋭いリズムの刻み、それはタンゴを演奏するのに実に相応しく、天使の楽器から悪魔の楽器へと変貌を遂げる。「ハイドンのサラバンド」「故郷」の演奏で天使の面と、アストル・ピアソラの「アディオス・ノニーノ」の演奏で悪魔と言われる所以を聞き比べた。バンドネオンの魅力を感じて頂けたなら、こんな嬉しい事はない（写真5）。



写真5 バンドネオンを演奏する星野氏

今回の講演にあたり、デビューして間もない頃よりお世話になった故石川浩司先生の「タンゴの歴史」を参考にさせて頂いた。改めて先生に感謝を申し上げますと共に、心よりご冥福を祈る。

(タンゴ歌手)

魅力あふれるサンバの世界—その多様性と歴史

根川 幸男

去る7月4日、京都外国語大学において、ラテンアメリカ教養講座の一環として、「魅力あふれるサンバの世界」が開催されました。大雨にもかかわらず多くの観客の皆さんにご来場いただき、ブラジル・カルナヴァルの映像、サンバ楽器の紹介、京都外大生の2人のアシスタントとともにサンバ・ステップ講座などを行い、たいへん楽しいイベントとなりました。

今回の講座では、サンバとは何か？サンバ、そしてカルナヴァルはどのように成立したのか？についてお話ししましたが、その内容を簡単にまとめて報告いたします。

ブラジルと言えば、サンバ。サンバと言えば、ブラジル。サンバはブラジルを代表する音楽で、4/2拍子のダンスミュージック。19世紀末に北東部のパイアで発祥したという説が有力です。その後、1888年の「奴隷解放令」を契機に、アフリカ系の人びとの移動とともにリオデジャネイロに入り、パトゥカーダというパーカッション構成のサンバにショーロヤルンドゥーという多ジャンルの音楽が取り入れられ、ポルカやマズルカといった舞曲の要素も加味しながら、ハイブリッドな音楽に発展していきました。

ただ、サンバと言っても、以下のようなさまざまな種類があります。

- ・サンバ・ジ・ホーダ (Samba de Roda)
- ・サンバ・カンソン (Samba Canção)
- ・サンバ・ボサノヴァ (Samba Bossa Nova)
- ・サンバ・パゴージ (Samba Pagode)
- ・サンバ・ジ・ガフィエイラ (Samba de Gafieira)
- ・サンバ・ホッキ (Samba Roque)
- ・サンバ・ジ・カルナヴァル (Samba de Carnaval)

ここではもっともよく知られている「サンバ・ジ・カルナヴァル」、すなわちリオやサンパウロのカルナヴァルで歌い踊られているサンバを紹介します。

サンバの歴史は、古くて新しいと言えます。まず、カトリックの祝祭であるカルナヴァル(謝肉祭)が行われていた宗教的な背景があります。復活祭に至る禁欲期間の前に大いに飲み食いして騒ごうというのがその趣旨ですね。先のサンバ・ジ・ホーダなどを踊っていたアフリカ系住民が中心になって、リオデジャネイロなど大都市でモーホと呼ばれるスラム地帯を形成し、これがサンバを生み出す温床になります。

1916年に、ドンガ&マウト・ジ・アルメイダ作の最初のサンバ曲“Pelo Telefone”(電話で)が作曲され、1928年には最初のエスコーラ・ジ・サンバとされる Deixa Falar (言わせておけ)

が創立されました。ただ、異説もたくさんあり、どの曲が最初のサンバで、どのエスコーラが最初に活動を始めたのかというのは議論が尽きません。

サンバ、カルナヴァルで見過ごせないのは、ブラジル政治との関係です。1930年、ジェツリオ・ヴァルガスが政権を掌握し、1934年に正式に大統領に就任。1945年に退陣するまで長期政権を維持します。このヴァルガス時代は、ラジオ放送の発展とともにブラジルの国民文化が形成された時代でした。サッカー、サンバ、カルナヴァル…いずれも草創期のラジオ放送を通じて、ブラジル各地に届けられ、やがてブラジルにはなくてはならない文化に成長していきます。

そんななか、1932年には、リオで最初の公式のカルナヴァルが行われます。5チームによるディスフィーレ（パレード）が、ブラッサ・オンゼという市中心部で行われたのです。それ以後、政府の補助などもあって、サンバ、カルナヴァルは大きく発展していきます。リオのカルナヴァルは、第二次世界大戦中も継続されたと言われ、戦後は「世界最大の祝祭」と呼ばれるようになります。

1984年には、最初のカルナヴァルが行われたブラッサ・オンゼの近くに、巨大なサンバ競技場とも言える「サンボドロモ・ダ・マルケス・ジ・サブカイ」が、オスカル・ニーマイヤーの設計で建設されました。リオの1軍や2軍クラスのエスコーラのディスフィーレはこちらで実施されるようになります。2008年は、ブラジル日本移民100周年でしたが、リオやサンパウロの多くのエスコーラが、日本人到着100年をテーマにディスフィーレを行いました。

現在も、毎年カルナヴァル2～3日目の日曜日と月曜日、このサンボドロモで、リオの1軍に属する12のエスコーラが覇を競っています。

ブラジルでは、こうした大規模なディスフィーレのほか、社交クラブやスポーツクラブ、そして街角のあちこちで、おのおのが自分流のカルナヴァルを楽しんでいます。皆さんもいつの日か、ブラジルを訪れ、本場のサンバ、カルナヴァルを体験してみてください。

(国際日本文化研究センター機関研究員／
IELAK 客員研究員)



サンパウロのエスコーラ・ジ・サンバ“X-9”での筆者と友人

連載：マヤ社会を考えるために 第5回 王国の境界線を巡って(1)

大越 翼

『カルキニ文書 (Códice de Calkin)』に記載されている、カルキニ村の境界標の名前のいくつかは、今でも残ってるんだよ。」こともなくそう言っただけなのは、アメリカ人考古学者アンソニー・アンドリュース博士だった。

1983年2月、メキシコのユカタン大学地域文化研究所に留学していた私は、友人の歴史学者セルヒオ・ケサーダとともに、16世紀初頭北部低地に栄えていたマヤ諸王国の政治社会組織に関する研究セミナーを企画・実施し、私は『カルキニ文書』の分析をもとにアフ・カヌル王国の政治領域について発表した。その後で博士がそう言ったのである。生まれて初めてアメリカやメキシコの研究者たちの前で発表した私にとって、彼の言葉は衝撃的で、今に至る私の研究の方向性を決定するようになるとは、このとき夢にも思わなかった。

「カルキニ村の境界標」とはこうだ。16世紀にマヤ北部低地に足を踏み入れたスペイン人たちは、マヤ人たちの居住形態を見て一様に驚いた。マヤ先住民がムラ(カフ cah)と呼んでいる「集落」は、本国のそれとは似ても似つかぬものだった。ヤシの葉で葺かれた屋根を持つ質素な家々の間には広い空間があり、お互いを目視する事ができないほど樹木が茂っていたのだ(写真1)。それはトウモロコシ畑であり、また様々な果樹、そして普通の森からなっていたのだ。



写真1 マヤの伝統的な家と周囲の樹々

だから、先住民にキリスト教を布教し、かつ貢納を課すためには、この居住形態は不都合極まりなかった。彼らを管理するためには、相互に離れた家々を大汗をかいて回らねばならないという、重大な問題を孕んでいたからだ。そこで、16世紀半ば以降、スペイン領アメリカで「集住政策」がとられ、その結果現在まで続くラテンアメリカの村や町の街区の原型が作り上げられたのである。すなわち、村の中央に教会とその前に広がる広場を造り、その周囲には役所などの公的な建物を配置する。そしてそこから基盤の目状に広がる街路に区画された居住空間に、これまで分散して住んでいた先住民を強制移住させるといったものだった(写真2)。

写真2 現代マヤの村落に見る街路
(カンペチェ州ヌキニ村)

<https://www.google.co.jp/maps/@20.4005711,-90.1528192,2377m/data=!3m1!1e3?hl=ja>
(最終閲覧日：2018年7月5日)

これは、単に居住形態の変更を意味したのではなかった。分散型居住様式のなかで、先住民は家の周りばかりでなく、あちこちに畑を作り、生計を立ててきた。その耕地を、新しく創設された村の周辺に集中させる、別の言葉で言えば、村の領域内で耕作することを集住政策は要求したのである。このため、隣接する村々の相互の領土内に散在している住人たちの畑を、整理統合するための話し合いが持たれ、その結果は、「土地権原証書」(“Título de tierras”)という法的文書にまとめ上げられたのだ(写真3)。

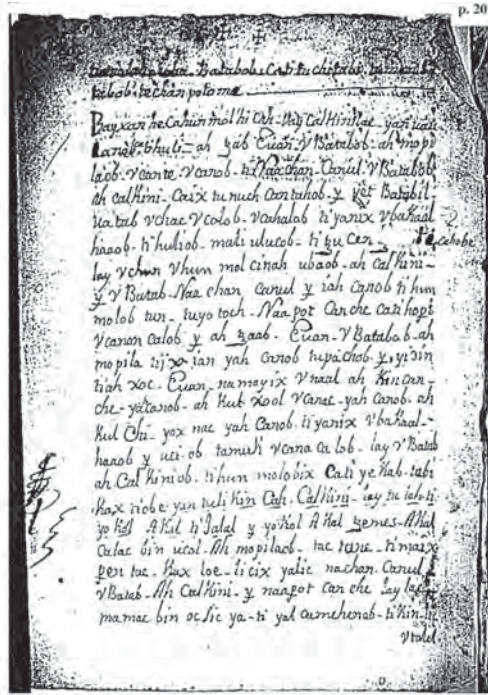
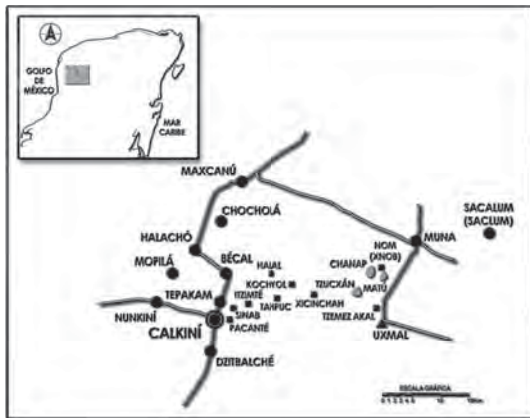


写真3 土地権原証書〔「カルキニ文書」より〕
Tsubasa Okoshi Harada (ed.), *Código de Calkiní*. Universidad Nacional Autónoma de México, 2009, p. 15.

最初に述べた『カルキニ文書』には、1579年に作成された土地権原証書が含まれている。まずはアンドリュース博士の言葉を受けて、実際にその境界線を歩いて記載されている地名を同定してみようと思いついたのは、ちょうど乾季で気温も下がって野外調査には都合のいい、会議が終わった翌月の3月のことだった。



地図1 カルキニ村東側の地域
Tsubasa Okoshi Harada (ed.), *Código de Calkiní*. Universidad Nacional Autónoma de México, 2009, p. lii, fig. 4.

カルキニ村やその北にあるベカル村の東側には(地図1)、サバンナ気候に適応した、背のそう高くない、トゲの多い樹木からなるジャングルが広がっている(写真4)。文書に記載されている地名は、村からかなり離れたところにあるので、車で行けるところまで進み、そのあとは歩いて行った。「歩いて」とはいうものの、村人の歩速は異様に早く、こちらは小走りで行かねば追いつかない。しかもあまり人は通らないジャングルの中を歩くものだから、横に伸びる枝にぶつからないよう腰を低くして通ったり、石灰岩の露出があって足をくじきそうになったり、村人には笑われる始末だ。また、気温が下がったとはいえ優に30度を超えていたから、たちまち汗だくとなり、まともに水も持って行かなかったから、パテそうになった。それでも、ツェメス・アカルという名の大きな池(後の調査で、人工の池であることを知った)(写真5)、チャナップにあるサバンナ(写真6)、コッチヨルという名の丘など訪れることができ、成果が得られたことに有頂天になった。

だが、である。文書によれば、これらの場所はカルキニ村の境界標だったとあるから、私は当然「境界線」はどの辺りを通っていたのだろうと考えていた。境界標と境界線は切っても切れないものだからだ。ところが、目の前にしている池や草原、丘にそのような「線」が通っていたことを示すものは何も見当たらない。それぞれ結構な広さを持っている空間である。一体境界「線」はどこ



写真4 ユカタン地方のジャングル

を通過していたのだろう。常識的には中央部のだろうか、と同行していたセルヒオに言ってみたものの、その場のしぎの思いつきでしかないことはわかっていた。これまで考えてみたこともない問題を、この調査で突きつけられ、回答を得るすべも見つからないまま大学へ戻った。

この問題に関しては、一つだけ手がかりがあった。それは、『カルキニ文書』に「ツェメス・アカルはカルキニ村に属する。なぜならそこにナ・マイ・タユが住んでいるからである。彼は老人であった」と記されていることだ。この場合「老人」は年齢的なことのみならず、彼が貴人（貴族）であったこと示しており、カルキニの首長との間には主従関係があったらしいことが読める。これと境界線とはどう結びつくのか、長い間解決できない問題として私を悩ませていた。

数年後のある日、午後の穏やかな陽の光を浴びながら、私は自宅で司馬遼太郎の『菜の花の沖』を読んでいた。江戸末期の廻船問屋高田屋嘉兵衛の半生を描いたものだが、ロシアが蝦夷地に出没するようになる章に、およそ次のようなことが書かれていた。「日本や東アジアは対人関係をもとに土地所有を決定し、一方ロシアに代表されるヨーロッパは、対地主義をもとに絶対的（排他的）

所有権を主張し、またその所有を示す境界標および境界線を設定し、かつそれを維持する努力を怠らない」と。これだ！直感的にそう思った。啓示と言っていい。数年来考えあぐねてきたことが、これによって明確に説明できることがわかったのだ。つまりこうだ。日本や東アジアがそうであるように、マヤでも、やはり土地の所有は対人主義をもとにしていたのだ。上に引用した『カルキニ文書』に出てくるナ・マイ・タユは、カルキニ村の首長との間に主従関係を結んでいた。だからこそ、首長は彼が住んでいるツェメス・アカルの地の辺りは私（首長）に属すると言えるのである。ちょうどそれは、司馬のたとえ話によると、暴力団の組長が、あいつは俺の舎弟だ、だからあいつのシマは俺のものだと言っている感覚に等しい。まことに漠然とした領域概念だが、人を中心とした関係性とは、もともとそのようなものなのであった。

では、これと境界線、境界標とはどのような関係があるのだろうか。そしてマヤ人らの土地所有概念はどのようなものだったのだろうか。これに関しては次号以降さらに詳しく見ていく必要があるだろう。

(IELAK)



写真5 ツェメス・アカル (Tzemez Akal)



写真6 チャナップのサバンナにて (案内の人と筆者)

書籍紹介

『移民の町サンパウロの子どもたち』

ドラウジオ・ヴァレーラ著

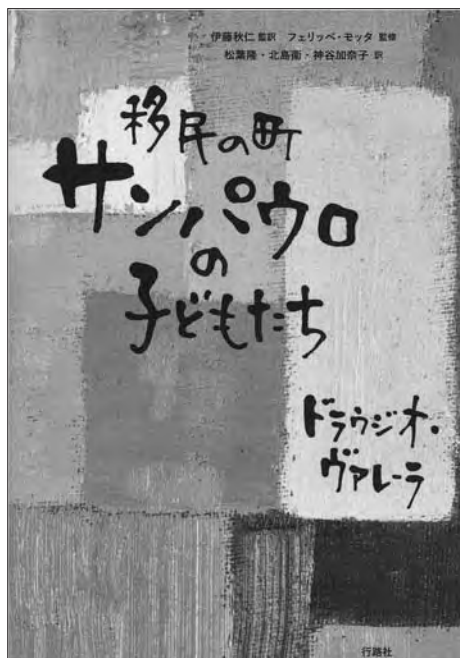
(伊藤秋仁監訳 フェリッペ・モッタ監修 松葉隆・北島衛・神谷加奈子訳)

(行路社 2018年 195頁)

1990年代、不況にあえぐブラジルは、人心の荒廃を背景にした暴力に苦しんだ。リオデジャネイロのカンデラーリア教会に集っていたストリートチルドレンの虐殺は世界の注目を浴びたが、それに勝るとも劣らぬ衝撃を与えた事件がサンパウロのカランジル刑務所での虐殺事件であった。囚人の暴動を制圧するため、武装したサンパウロ州軍警察の警官68名が所内に侵入、ほぼ丸腰の囚人たちに容赦なく銃弾を浴びせかけ、102名が射殺された。

この事件は、のちにノンフィクション作品として上梓され、ブラジル国内でベストセラーとなり、ブラジルでもっとも権威ある文学賞のジャプチ賞を受賞した。その後「蜘蛛女のキス」で知られる映画監督エクトール・バベンコの手で映画化され(タイトルは「カランジル」)、カンヌ国際映画祭のパルムドールにもノミネートされるなど、世界中で高い評価を受け、カランジルの惨状を世界に知らしめることとなった。このノンフィクション作品(書名は『カランジル駅』)を著したのが、同所で矯正医を務めていた医師ドラウジオ・ヴァレーラであった。彼は、当時、所内で拡大していたAIDSの防止をめぐる奮闘や、所内で囚人が置かれていた劣悪な環境を描き出し、囚人たちが犯罪に手を染める背景にまで踏み込んだ渾身の一冊を書き上げた。

ドラウジオ・ヴァレーラは、マスコミなどにも頻りに登場し、医療をわかりやすく民衆に解説するブラジルでもっともよく知られた医師の一人で、影響力のあるコメンテーターでもある。1943年生まれ、著者が、1999年に『カランジル駅』を発表した後、すぐに着手したのが本書『サンパウロの子どもたち』の原本である『ブラスの町』であった。同書は、著者が幼少時代に過ごしたサンパウロ市内の移民地区ブラスでの回想録である。その筆致は『カランジル駅』とはまったく異なっている。おそらく著者にとってこれら



の作品は、『カランジル駅』の執筆で消耗した精神を回復させる働きをしたのでないかと評者は想像する。その視線は温かく優しいものだ。

監訳者でもある評者にとって、この作品の面白さは、日本の戦中から戦後にあたる時期のブラジルのプロレタリア地区での、のどかで平和な日常を垣間見ることであった。同地区には、多くの外国人移民(おもにイタリア、スペイン、ポルトガル人)とその子孫が集住しており(著者自身もスペイン人とポルトガル人の祖父母を持つ)、彼らは、ヨーロッパやアジアの戦乱の地から身も心も離れた場所で、豊かになる夢を抱きながら、精一杯働き、生活をしていたのであった。そこはさまざまな民族が混在し、ブラジルらしい騒々しさと大らかさと活力を感じさせる場所だったこともうかがえる。

移民の子孫の多くは努力が報われ、教育をベースに社会上昇を果たし、プロレタリアの居住地区

を離れていく。その後、同地区には主として国内の北東部からのアフリカ系や混血のブラジル人移住者が居住した。ヨーロッパ人移民が比較的容易に社会上昇する一方で、アフリカ系を中心とした国内移住者の多くは終わることのない貧困に苦しみ続けることになった。

本書は監訳を本研究所研究員の伊藤が、そして

監修を客員研究員のモッタが務めている。伊藤が講師を務める社会人向けのポルトガル語講座の受講生（松葉、北島、神谷）と共同で訳出や解説も行った。伊藤とモッタはコラムも執筆した。末尾にはブラジル駐在を経験した訳者（松葉、北島）のエッセイも添えてある。

（伊藤秋仁／IELAK）

のていしあす NOTICIAS

<第 17 回ラテンアメリカ教養講座開講>

2018年6月6日（水）から5回にわたりラテンアメリカ教養講座「ダンス！ ¡Danza! Dança!」を開講した。プログラムは以下の通り。概要は本号に掲載。

6月6日（水）「カポエイラの魅力と多様性」
西村晃輔（NPO 法人カポエラジェライス理事長）

6月13日（水）「魅惑のフラメンコ」

山本秀実

（フラメンコ舞踊家・京都スペイン文化協会理事長）

6月20日（水）「『Shall we ダンス?』の世界ーラテンアメリカ起源の社交ダンスー」

辻 豊治（IELAK 客員研究員）

6月27日（水）「アルゼンチンタンゴにおけるバンドネオン～天使から悪魔の楽器へ～」

高橋京子（タンゴ歌手）

7月4日（水）「魅力あふれるサンバの世界」
根川幸男（国際日本文化研究センター機関研究員・IELAK 客員研究員）

<広島市立大塚中学校が在京都メキシコ名誉領事館を訪問>

2018年5月22日（火）、広島市立大塚中学校の生徒7名が京都外国語大学にある在京都メキシコ名誉領事館を訪問した。

修学旅行での学習の一環で名誉領事館を訪れた一行は、川口京都外国語大学ラテンアメリカ研究所事務室長による説明のもと、メキシコの基礎情報や食文化、芸術、歴史について、様々な角度から興味深く学んだ。

日本から遠く離れているメキシコについて生徒達は積極的に質問し、知見を広め、充実した時間を過ごした。

べんたな ventana No.35 

ラテンアメリカの子どもたちは裸足でボールを蹴りながら、ワールドカップの舞台を夢見る。ウルグアイ代表エディンソン・カバーニもその一人だった。「家にはシャワーもトイレもなかった。ビデオゲームもテレビも。でも、外でサッカーができた。最初のゴールと最後のゴールを決めた子供はアイスクリームがもらえるから、頑張った。最高のご褒美だったな。…今、僕は31歳。首都モンテビデオにも家があるし、念願の海外チームへも移籍した。でも、今の生活はといえば、ホテルから練習場へ行き、バスで飛行場へ。そして再びバスでスタジアムへ。毎日がその繰り返し。外に出て太陽を浴びることもないし、靴を脱いで泥んこまみれになってボールを追うこともない。もうあの頃のように夢だけを追っているわけにはいかない。賢い生き方ってなんだろう、って思っている。でも、今の僕にも夢を追える瞬間がある。90分だけ。アイスクリームが欲しくてピッチを走り回ったように、W杯優勝トロフィーを獲得するために無心でボールを追うんだ。」

<https://www.theplayertribune.com/en-us/articles/edinson-cavani-uruguay-letter-to-my-younger-self>

（立岩礼子／IELAK）

いんぷおるましおん INFORMACIÓN

京都ラテンアメリカ文化協会ニュース

<新年会開催>

2018年1月29日(月)、京都ラテンアメリカ文化協会・京都スペイン文化協会合同新年会が開催された。

今年の会場は大正5年に創業されたという歴史あるレストラン菊水。森田嘉一会長の開会の挨拶、来賓の祝辞、喜寿・米寿のお祝い、京都スペイン文化協会山本秀実理事長による乾杯の発声のあとラテン音楽グループ「ジミー・アンドラーデ&チョコリコ」の演奏が披露された。



会員の皆様との集合写真

<第12回例会開催>

今年も第12回目となる例会が2018年3月11日(土)に開催された。今回のメインは神戸にある移住ミュージアム。この移住ミュージアムではブラジルなどの中南米諸国への移住者の移住の準備から移民船での生活、現地での生活の様子を映像や当時の持ち物の展示品を見ながら感じることができる。当時の移住者たちがどのような心境で海を越え、遠く離れた異国で懸命に生き抜いたかを窺い知ることができた。



移住ミュージアムにてセミナーの様子



いえらっく・めも



「いえらっく」35号をお届けします。地震、洪水、猛暑に襲われ、ここが日本かと驚くばかりです。2010年に続き2016年にも大型ハリケーンに見舞われたカリブ海のハイチでは、世界最大規模の支援が投入されたにもかかわらず、復興への道のりは長く遠く、そして貧困の問題をさらに深刻化させています。翻って日本の場合を考えてみるとどうでしょう。なにか格差の問題が見えてくるのでしょうか。アジア研究で知られるマドリッド・コンプルテンセ大学のフロレンティーノ・ロダウ教授は日本には災害の文化があると言っています。そうなんですか。どうなんですか。ラテンアメリカとカリブ海の文化といえ、その多彩な身体表現です。今年の教養講座は「踊り・ダンス」をテーマに、来場者参加型の楽しい講座となりました。講師の先生方の楽しいトークや見事なパフォーマンスのおかげで、盛況のうちに終わったことを嬉しく思います。どうもありがとうございました。(RT)

2018年7月1日発行(年2回)
 発行 京都外国語大学ラテンアメリカ研究所
 〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6
 TEL:075-312-3388 FAX:075-322-6237
 E-mail: ielak@kufs.ac.jp